Japanese Working Class Artist ～ RYO KANZYU

短い物語P&D

埃誇線

ORIGINAL
SINGLE

埃誇線（１／１）

僕は初めて走る道に緊張し、ハンドルを少しだけ強く握っていた。

太陽は高く、空は青かったけれど、事故だけは起こすまいと興奮を抑えた。

それでも新鮮な景色は、自分という容量の空き領域に勢いよく流れ込んで来た。

観たことがあるような街並も、引き込まれそうな路地も、どれもが未開拓で眩しかった。

けれど、今日の僕は目的地に向かっていたわけではなかった。

途中にコンビニがあれば寄る。

気になった道があれば滑り込む。

そんな感じの無計画なドライブ。

決して制限速度をオーバーすることはないけれど、期待感だけは少しずつ加速していた。

思い出すのは、自転車でどこへでも行けそうだった子供の頃。

やがて、その勢いを止めるかのような踏切が見えたけれど、風景はいっそう絵になった。

警報が聞こえてくると、僕は無理をしなかった。

この時、僕はここで止まるように誘導されていたのかもしれない。

通り過ぎてしまうだけでは、もったいない気がした。

線路のある風景は好きだった。

撮っておきたいと思った僕は、くたびれたガラケーを開いた。

写真の知識はメモ一枚程度で十分。

撮影のテクニックは不問。

雑に写したとしても、意外と良いのが撮れたりする。

ただ、撮り過ぎには注意。

想い出が薄れる気がしてならない。

僕は揺れる遮断棹の真ん中辺りにレンズを向けた。

まもなく、右の方から音が近づいて来た。

僕は静かに緊張し、構えた。

満足できる瞬間が撮影できれば、たった一枚でも満足だった。

そして、車両の先端が画面に飛び込んで来た瞬間、僕は撮影ボタンを押した。

すると、いつもと違う機能が働いた。

録画はしていないのに、映っている車両がゆっくりと動く。

なぜか動画となった一枚が、スロー再生を始めていた。

これは、おそらく誤作動か、把握していない機能。

いや、違う。

おかしくなっていたのは僕の視覚だった。

突然めまいに襲われたような気分。

僕は画面の外へ視線を移した。

ゆっくりと通り過ぎて行く一両の電車。

その運転室の乗降口を見ると、窓に人影。

運転士だろうか。

僕の方を見ているようだった。

突然のクラクションが、僕を通常モードに戻した。

少し慌てはしたが、徐行することを忘れずに線路を越えた。

そして、急かされるようにアクセルを踏む。

「乗らないのかい」

あの窓から僕を見ていた人は、そう言っていたのかもしれない。

そんな事を考えながら、僕はさらにスピード上げた。

バックミラーを覗くと、踏切の上で風に舞う落ち葉が見えた。

「待って。一緒に連れて行って」

そんな声が聞こえてきそうだった。　～終わり